

# 幼稚園に於ける談話の使用法について

アトウッド氏「幼稚園の理論と實際」

(Atwood's Kindergarten Theory and Practice) より抄譯

東京女子高等師範學校  
附屬幼稚園保姆

小 高 つ や

時代と國の如何を問はず、一般に子供を喜ばせ得るものは、何れも其の中に價值あるものを有して居る。何等かの方法によつて子供の個人性の發達に役立つものであると云ふ事はかのフレーベル氏も云つて居るが、これは實に尤もな論である。それ故フレーベル氏は或る玩具、例へば毬とか人形とか云ふ様なものは、いつの時代にも、子供に對して共通普遍の樂しみを與へて居り、明らかに教育的價值を有して居るものと信じて居つた。同様に目立たない、隠れた方法で、時代から時代へと傳へられて來て居る傳統的遊戯は、それが初めに持つて居つた儘の價值をもちつづけて居

ると云ふ事のために、今迄存續して居るのである。「物語」は上述の種類に屬するものであつて、その上其れ自身の中に、善い要素をもつて居るので幼兒教育に貢獻するのである。それ故我々は、幼稚園に於てはお話が保育課程の中で重要な位置を占めて居ると云ふ事に就て少しも恠しまない、否寧ろ、もしそうなつてゐない時こそ我々はそれを奇としなければならぬ位である。

## 一、おはなしの役目

民族の發達の上から考へて見ても、種々の形式をとつてあらはるる物語は、なかく重要な部

分をなして居る。昔時の彈唱詩人——(註、歐洲に於て王侯將相などの功績をたゞへる歌を作り、琴を弾じながら、之をうたふ事を職とせし人)——は實に立派な「はなし手」であつた。また、古人の敘事詩は、今日、我々が模範とすべき作物である。物語を好むと云ふ事は、幼兒にのみ限られてゐるものではない、即ち物語は廣い又精密な形式によつて多數の青年や大人をも、その魔力で捉へて居るのである。

フレーベル氏は『子供がお話を愛好すると云ふ事は、そのお話が、いろ／＼の形をとつて子供自身の小さい生活の經驗を表現するためである。而かも其の小さい生活は、子供には、幾分ほんやりと了解されて居るのであるが、しかしまだ／＼自己をおさへる事をしらない生活をして居り、且つ言葉の數にも制限があり、多くを知らぬ子供達の事であるから、未經驗のその表現を實に慕ひあこがれるのである』と云ふ事を信じた、愛情とか、

同情とか、誤解とか、誘惑や悪習慣と戦ふ事とか、英雄的冒險とか、自分の我儘な心と戦つて克つ事とか、かうした事柄は、物語殊にお伽噺の中に見出されるのである。お伽噺は子供が自分の思ひ通りの世界を持ち來さうとして試みる未熟な計畫のヒントとなるものである。恰も立派な小説が我々大人に人間の心の共通な歴史をおもはしめる如くよく考へられたる、童話はまた子供にこの歴史の始源をおもはせるのである。大人の鈍い想像力をもつて見れば、お話はつまらない曖昧なものに見えるが、子供にとつてはお話は、實に、命と活力と真理とに充ち／＼して居るのである。何となれば、これらお話は、子供のいろ／＼の經驗を暗示し、又時に困難な事についても道を示してくれる、實にお話は子供の生き生きと發達して行く靈に、他では見出す事の出來ない滋養物を十分に與へるのである。

幼稚園においてお話を用ふる主なる理由は此處

にあるのである。

## 二、お話の實際的價值

お話が子供にとつて、如何に價値あるものであるかと云ふ事を、一層實際的に説明せよと望む人々に對し、我々は更に附け加へて云ふ事が出来る。即ち「おはなし」は子供にとつては、文字の始源である。適當に選んだ「お話」は第一子供が好きになる。従つてよき文學に對して興味をもつ様になり、これはやがて書物を好むと云ふ事に導かれて行く。實際書物を愛好すると云ふ事がなければ我々の靈は、たゞ空虚なものとなつてしまふ。これあるによつて人間の心が孤獨にもならず、又決して友を失はぬのである。

夢と書物、何れもこれ一つの世界。

そは有形の世界にして純且つ善。

そをめぐり肉と血の蔓は上りゆく。

我等の慰めも我等の幸も其處に生ひ立つ。

Wordsworth's Personal Talk.

またお話によつて、子供は語彙を増し、發表の基礎をつくつて行く。且子供がよい行爲をするためにも、また一層價値のある理想的の生活に向つて、たへず進んで行くためにも、直接の手段となる事は云ふ迄もない。ことにお伽噺はよい行爲する様に導く上に貢献する所が多い。即ちお伽噺は明瞭に簡單に、例へば貪慾、不正直、殘忍、粗暴などの習慣が如何なる結果を來すかを示し、同時に其反對——寛大、正直、親切、禮讓などが——如何に美しいものであるかを明らかに示すのである。

## 三、材料選擇上の二つの誤

お話を選ぶ場合になると、保姆は實に隨意にまた豊富な材料を見出す事が出来る。古典クラシック的なもの、

神話、傳説、お伽噺などが一方から我々を誘ふと  
また、他方には、實に玉石混合の近代の物語が非  
常に勢で、我々の選擇を要求して押しよせて來る。

この豊富な材料を取捨する時に、保姆があまり  
氣にとめない二つの危険が潜んでゐる。即ちあま  
りよい話が澤山あるとこれを矢鱈に時間割の中  
に取込んで澤山話をきかせすぎて、そのために子供  
を謂ゆる心的消化不良に陥らしめる事がある。ま  
た今一つは、保姆がしばしば幼稚園時代の子供に  
はわからない話をしてきかせる傾向がある。そし  
て十二三才の子供の有する同化力を幼稚園の子供  
に要求したりする。實に感じのよい話で保姆自身  
が大好きなものであると、子供に話さずにいられ  
ない、しかも其話が劇の様になつて居ると、實際  
話してゐる中に子供の注意をひく。そこで先生は  
充分に幼児がその話の意味を呑込んだものと思つ  
てしまふ。然し實際は其話の有する「美しさ」と  
「眞實」とは少しも子供には解らず、只、子供は、

そのお話の外側にある殻とでも云ふ様な所を掴む  
にすぎない事がある。

これに由つて、保姆は二つの目的を無効にして  
しまふ。即ち保姆自身が直接無駄な努力をして居  
ると云ふ事は勿論、更に子供が成長して小學校へ  
行く様になり、今度は其話が充分分かる様な年齢  
に達した時に、小學校の先生はその同じ話を話さ  
うとする。この時既に幼稚園の時に一度聞いて居  
ると——わけもわからずに——折角の美しい話も  
その生き生きした光彩をうしなつて居るから、小  
學校の先生の努力も無駄になる。「私達はそのお話  
はもう幼稚園で聞きましたよ!!」幼稚園の時期よ  
りも數倍、心力の發達せる小學校時代に、折角、  
先生が子供の要求にあふ様にとつて、選んだ話  
をしはじめると、四年生の兒童から、かうした厄  
介な挨拶を受ける事がある。

保姆は「お話の選擇」と云ふ事に於ては賢明な  
辨別をすべきである。昔からあるものでも、又近

代のものでも、「子供のために書かれた話」の大多数は、我々が幼稚園で接する未熟なる年齢のもの——即ち幼児——には適當でないのである。例へば、かの有名なインツプ物語でも、あの澤山ある中で、四才乃至六才の兒にわかるものは、僅かに五つか六つを出ない。一般に神話、又は多くの傳説についても、同じ事である。勿論これには個人的除外例——ある子供は特別にわかるかもしれない——はあらう。しかし先づ普通の幼稚園の子供については、上述の事が云へるのである。しかし昔からあるお伽噺の寶庫は實に保姆にとつて、一層研究する價值があるのである。

またアンダーセンの美しいお伽噺、あれはほとんどすべてが幼児によりも、もつと大きな子供のために書かれたものである。

ハリソン氏の「お話の國」の中にある「小さなベタと、びつこの巨人」及び「ハアウエダ王」などは、念の入つた象徴主義（トポニム）を表してゐるので、幼兒

には高尚すぎる。實際ある幼稚園で、この話をした結果、その不適當な事を證明してゐる。

またリチャード夫人の面白い實話『金の窓』もその一つ二つをのぞいては、先づ幼兒よりも大人に適當なものである。

ある場合には、お話の原形を變へて、子供の智力にあふ様にする事も實際ある。けれ共、これが賢い方法であるか、どうかは未定の問題である。

短篇物語（ショートストーリー）は短いながら、一つの完全な、或は少くとも、優良な標本として、つくられて居るのであるから勝手にちぎれ／＼にして、之を損ふべきものではない。何故保姆諸君は今わからない話をそのまゝ取つておいて、充分わかる時期に受持の小學校の先生方に、之を譲らうとしないのであらう？ 恐らく、保姆として長い經驗をもつて居る大抵の人達が、まだ初めの頃には子供に上述の様になわかない話を澤山して聞かせた事であらう。實際先生は自分がよい話と信じ、又大好きである

から、非常に上手に、子供達に話す。子供等は夢中になつて聞いて居る。そこで先生は子供はきつとその話の美しい點も、眞の意味もとらへ得たものと思つてゐる。扱て他日「幼兒は決してかゝる難しい話の眞意を捉る能力を有して居らず、且つ豫期した様な理解力までには、まだく幼兒期には達して居らない」と云ふ事を認めた時に、『何故あの時、あの様に注意して聞いたか』と云ふ事が、寧ろ不思議に思はれるのである。其難しい話から幼兒は何か心的内容を得たであらうか。もし得たとすれば、それは彼等の未熟な智力に相應する様に、無理にこぢつけたものではあるまいか。或はまた、かの『ヘレナリッチーの目覺め』の中にある小さなダビトの様に、保姆が何度顎を動かすかを數へる事に一生懸命であつたためであらうか、——それであれ程までに注意して居たのであらうか——。

實際「童話」の大部分は、幼稚園の時期の子供

よりも、もう少し大きな兒童のために書かれて居るものが多い。けれども、さりとて、我々は失望する事はない。尙、充分に選擇の餘地をもつて居るから。『子供の心に重荷を負はせ過ぎてはならぬ』と云ふ事を、我々は常に忘れてはならぬ。『よいお話』はくりかへすがよい。子供の「お話」に對する愛好心はその話に親しみがつく程、増して來るのである。あまり澤山の話を子供に提供する時は子供が變化を要求して、飽きたりない様な慾——したがつて心に落ちつきがなくなる——誠に望ましからぬ慾をおこす様になる。

#### 四、よき話の重なる性質

如何なる性質の話が、幼稚園時代の年齢の子供の要求にかなふものであるかを暫く考究する事も、我々に必要な事と思ふ。かくて我々は「生活」の選擇に都合のよい「お話の研究」について一つの手引が得れる。

幼稚園期の子供は、原始的な要求、原始的な感情又原始的な經驗を取扱つて居る「話」を注文する——即ち幼児自身の生活が原始的である——。

幼児は入込んだ仕組を掴む事も出来ず、またある近代のお伽噺が要求する様な、精細な分析をする事も出来ない。彼等の要求にあふものは、其想像に直接訴へ得るものでなければならぬ。即ち反動が即時に来るものでなければならぬ。子供はある到達せんとする目的に行くに、迂回した道を通つて行く事には少しも興味を起さない。且お話は活動に富み簡単な勢のある言葉であらはず事が大切である。「反覆」並びに「直説法」この二要素は、たしかに幼児にはなす理想的の話の備ふべき特性である。かの昔からある有名な「三匹の熊」「三匹の小豚」「小さい赤い牝鶏」の如きは、幼稚園時期の、子供に話すべき完全な話としての、すべての必要なものを巧みに組合せて居る、——即ち活動的である事、仕組の簡単な事、單純で、勢

のある言葉、反覆と直説法である事。かかる話は昔から今まで、子供部屋で繰りかへしくかたり傳へられたるもので、子供の心の直接の訴へに満足を與へると云ふ所から、其の話が存續して居るのである。實にこれらの話の作者は幼児をよく了解して居つた。

グリム兄弟によつて、集められたお伽噺のあるものは殆ど理想的に極く小さい子供に話すのに適して居る。

子供のした事をはなす簡単な英雄譚及び殊に動物の勇敢な物語などは、子供に歡迎される。滑稽談の中でも、その滑稽が直接あらはれて居るもの——換言すれば、むき出しの模寫をしてゐるもの——は子供の要求にかなふ。けれども其滑稽が、あまり精巧なものになると、全く幼児には、其面白がわからない。

人間生活に於て「滑稽味」の必要をみとめて居る人は皆時々滑稽談を取り入れる事の値打がわか

るであらう。實際「滑稽味」は我々大人にとつては、安全瓣の様なものである、眞底しんぞこから笑ふと云ふ事は、兎に角よい事であるから。

之に反して歴史譚は幼稚園期の子供には適しない。平均してこの時期の子供は「永き時代」と云ふものを了解しない。且つ譚を媒介として之れによつて、彼等を歴史の場面に引き入れ様と企てるのは「時の」上からも、又「よい材料」の上からも、非常な浪費になつて了ふ。自然界の物語は——その目的が自然界に關するある事實を教へると云ふ事にあれば——丁度ホメオパシー（註、これは病源を以て病氣をなほす法で、例へば下痢をなほすのに健全體に與へれば下痢をおこす様な薬をあたへるのである）を與へる様にすべきである。（子供が直接經驗した時に其經驗材料をとらへて適當に話すがい）幼兒に自然界を知らせるのには「話す」よりも、先づ彼等を直接自然と觸れさせて、それによつて自然界の智識を得る様に仕向ける方がは

るかによい。しかしまた幼兒の有する範圍内で、説明出来る事實の話もないではない。動物の生活状態を氣持ちよく模寫して居る話も、澤山ある。そしてこれは子供を非常によこばせ又利益になるものである。

幼稚園では道徳的話——其目的がある必要ない教訓を力づくよく云ひあらはさうとする場合に——を殊更にする餘地を持たない。實際我々の用ひて居る凡べての話は、皆道徳的價値を有して居ると云ふ事が出来る。お話によつて幼兒の心に植ゑつけられて行く眞理は、古めかしい道話——かゝる話とはかく成程と合點して、それに引きずりこまれるよりも、反つて反抗心を起させ易いものであるが——よりも効果のあるものである。

## 五 話し方に就て

幼稚園では、お話を幼兒に讀んできかせると云ふ事よりも、話してきかせる方が習慣となつて居



るが、この期の子供には特別な場合の外はどうしても「話す」方が一層よい方法である。お話は「親しみ」をつけるものであるから、話して聞かせる」と云ふ事が「讀む」よりも一層子供と先生との間柄を近くする。「話す」事であれば、先生は話して行く間に、子供達の直接の要求にかなふ様にも出来、又容易に戯曲的にも、寫實的にもして行く事が出来る。かうすれば、一層よく子供の注意をあつめ、興味を起させる事になる。一體「お話」は親しみを作るものであるから、先生のまはりに集める子供の数は、なるべく少くすべきである。幼稚園全體の子供を一室にあつめて、大きな輪をつつて座らせて、そこで話を聞かせやうなど、思ふのは、それは先生の大間違ひであると思ふ。實際かゝる方法で話してゐる保姆を見ると、氣の毒な感じがする。この方法で幼兒全體の注意を集める事が出来るなどと云ふ事は殆どない事である。

大きな輪をつくつてゐる子供達の、保姆から最も遠い所に居る子供にも、話の聞える様に、またごく手近に居る子供の注意も集める様に、しかもまた年少な彼等の興味を引き入れて、且つお話の微妙さをも掴むやうにと、斯くの如く多方面に努力する人を見る事は、傍觀者には全く苦痛な事である。

何處の幼稚園にも、年齢のいろ／＼なまた心的發達の種々の段階にある子供が集つて居るわけである。しかるに談話にせよ、恩物遊びにせよ、作業にせよ、一つの事を彼等全體の望みになはしめやうなどと企てるのは、誠に不合理な事である。幼稚園でする仕事は子供一人一人に適當するものでなければならぬ。そこで「お話」もいろ／＼の子供のさまざまの興味と望みに適ふ様にと云ふ事を心掛けて選ぶべきである。この目的を達するためには、先づ子供全體を其能力に應じて、二つにも三つにも、またこれ以上にも、幾つかの

組にわけ、各組に適するやうに選擇した話をはな

すと云ふやうにするがよろしい。この方法にすれば、子供が喜び、且爲めになるのみならず「話し手」たる先生も、その組に適當な話をするると云ふ事で、また楽しさが増すものである。話をするると云ふ事は、先生の側にも楽しいものでなければならぬ。「お話」は實に保姆と幼児との間の親しみの深い關係をつくるものであるのに、それが幼稚園の時間割の中の一つであるから、しなければならぬと云ふやうな義務的な、また少しも、形式的な考へでするやうになれば、「お話をする楽しさ」はなくなつてしまふ。

従つて次に起つて來る事は、同じ一日の中に、いろ／＼異つた話が、それ／＼適當した組の子供に話されると云ふ事である、一つの話を選んで、それをどの組の子供にも強いると云ふ習慣は、一度一都市のあらゆる幼稚園の子供に、一定の日に一つのきまつた話をする習慣が有害であるやう

に、誠にいけない事である。

我々はこの後者を實際目撃した。そしてこの誤れる教育法にしたがはねばならない先生と、またそれを強いられる子供達と、どちらに餘計同情してよいかわからなかつたのである。例へば、ホーレスマンの教員養成所にある幼稚園の子供の望みに誠によくかなつてゐるお話でも、それを、もし東海岸の外人の子供——せまくかぎられて生活してゐる人々——に話したならば、これらの子供の心には、一向力づよい影響をあたへず、かへつて集注力を害し、子供を不注意にする直接の手段となる事であらう。

お話をあまり好まない子供があるとすれば、それは彼等の想像を激動し、精神をやしなふやうな話を聞かせないからと云ふよりも、寧ろ、彼等の望みに一層かなつた話をしてやらないためである。望みにかなつた話とは、子供を全く知らない世界につれて行く様な話——例へば一度一度も海

圖をみた事もなく羅針盤も知らない人が、思ひもよらない所につれて行かれて氣も遠くなり、遂方にくれてしまふやうな事である——でなしに、幼兒自身の生活を通じてよく解し得るものであり、話をきいてゐて、勢づけられ、元氣になる様なものである。

お話をすると云ふ事は一つの技術である。或る人は生れながら、この技能をもつて居り、又ある人は絶えず努力することによつてこれに熟達する。誰でも保母は「話す事」に於ては一つ技術家でありたい。かく云ふ事が不可能ならば、すべての保母はよろしく「話す事」には一技術家たらんとして努力すべきである。この要求は決して過分のものではない。この技能を獲得するのに、何も定まつた、確固たる規則があるわけではない。それは全く大部分一人一人の獨得の人格に關する事であるから。しかし、此處に經驗あさき保母諸君のために、「如何にせばこの技に熟達するか」と云

ふ事の助けとなる點を簡單に述べて參考に資する事とする。

## 六 話の準備をなす上に

### 參考となるべき諸點

先づ一つの話を選んだならば、其全體の體裁と特色をつかむ目的で、それを讀まねばならぬ。次に其の特に目立つた點、及び其特別な様子をのみこむために、各人が必要に應じてゆつくりと、幾度も繰返してよむ事が大切である。決して言葉そのものとして暗記してはならない。「よく話す事にこの暗記位、危険な事はない。何故ならば「おはなし」は暗誦する事ではないのであるから。お話を暗記して子供の前に出る先生は實に其身を危険な位置におく人である。即ち第一忘れてしまふと云ふ事もある——これ位困る事はない——また話の途中で子供が何か云ひ出したり、又は不意に參觀人があつたりすると、すぐにまごついてしま

つて、言葉が出なくなつてしまふ。しかし話の中に出て来る詩とか或は幾度もくりかへして出て来る句などは勿論、一語一語に暗記しなければならぬ。けれども、概してお話は保姆自身のものとなり、その人の一部分をなしてしまふものでなければならぬ。そうなつて話せば、其話は生き生きとして、元氣よく盡きざる泉から、おのづから湧き出して来るやうに思はれるのである。話しに熟達すると云つても、何等外に方法も近道もない。暗記された話と云ふものは、實に器械的で形式的で、其の話のもつて居る使命を不完全にしてしまふものである。

話を自分のものにするには、先生は先づ其の主な筋を充分に呑み込んで、それから其本を閉ぢおして話して見るがよい、出来れば聲を出して。(自分だけが其の話を興味深く傾聴して居る人であるが)次に都合がよければ兄弟でも、近所の子供でも「子供の友達」に話してきかせるがよい。身振

が必要な時に、身振をする事を恐れてはならない。實際先生は、戯曲的のつけ元氣をして見せびらかしの<sup>情</sup>居氣を出す<sup>と云ふ事</sup>は要心して避けなければならぬけれども、同時に「戯曲的の活氣」と云ふ事の意味を知らなければならぬ。要するに保姆は種々の仕事をする所に取る所の注意深い用意周到な態度を「お話の準備」に際しても、取らなければならぬ。扱て、いよく先生が話を聴く子供を、自分のまはりに集めたならば、先づ自己意識をなくしてしまはねばならない。「サア私達の子供と一緒に暮りませう」と云ふかのフレールの標語<sup>モットー</sup>を思ひ出すがよろしい。かうなれば、たとひ話をしてゐる最中に、園長がはいつて、來やうと、文部省の役人が參觀に來やうと、又子供が突飛な事を云ひ出さうと、先生は一向妨げられずに話す事が出来やう。「話」と、それを話す先生とが一體になつて居れば其處に何等恐るべきものはない。この幸な境涯には、なか／＼一度や二度

話した位では、達せられるものではない。けれども、この理想に達しやうと怠らずつとめたならばやがてこの境涯に入る事が出来る。

「お話をする事」と關聯して先生が正しい國語を使用する事が必要であると云ふ事を忘れてはならない、不注意な發表や下手な發音をしない様にたえず氣をつけなければならぬ。子供は實に模倣者である。彼等は驚くべき熱心をもつて先生の言ひ振りや、音聲の調子や、發音を、我がものにしやうとするのである。よい文學をよむ事は、正當な國語を用ふる主な助となり、また文學の價値を鑑賞する事から云つても一番よい方法である。けれどもよい國語を使用するのも、明瞭な發音をするのも、それは習慣が最大の要素となるものであるから、先生はこれらの點に於てよい習慣をつけるやうに心掛けねばならぬ。

ノラ、スマミス嬢は「話し方」について、實によい處方箴を我々に與へて居るから、次に記して見やう。

「純粹な文學的の趣味を一筋——筋とは藥をはかる計量器の度盛を云ふ——身振と圖解とを二筋。戯曲的活氣を三筋、雄辯と明瞭な發表とを四筋、これに「氣轉をきかせる事」と「思ひやり」とを一撮ツマビ加へる事」と、

氣轉をきかせる事、即ち先生自身が話しをきいて居る子供達に合ふ様にし、又子供の特別な要求を見出すやうにして、其話が子供に適する様にし行く事は、「話し方」に成功する上に於て、最初の、また、なくてはかなはぬ事である。かの生れはがらの「話し手」——生來話の上手な人——は、たしかにこの賜を授つて居るのである。

「お話の内容と其精神とに對して同情する如く、子供の氣分と生活とに對して思ひ遣る事はまた肝要な事である。話しの上手な人」は必ずこれが出るのである。我々自身が面白くも思はず、鑑賞も出来ないやうな話をしやうとするのは實際間違つてゐる。全くあなた自身が没頭する事の出來な

い様な話にあなたの生命をうちこむ事の出来る筈がない。この事は實際、外部からの權力をもつて「これ／＼の話をせよ」と命令された幼稚園が幾度も例證して居る事である。これは談話の技術の發達には、ほとんど致命的の不幸である。

お伽噺を選ぶ時に、ある場合には、その話の美點及思想をおかさなない程度で、子供の理解と興味に一層かなふやうにするために、極めて僅かの變化を必要とする事がある。例へば「蛙の王様」の話で、其終を幸福なる結婚で結ぶよりも、再び子供が自分の家、両親のもとにかへつて幸福になると云ふ事で結ぶ方が一層よい。結婚問題は幼稚園の子供には一向興味がない。之に反して離れてゐたものもとにかへると云ふ事は彼等の生活にとつて實に生き生きした經驗である。それ故かの「シンデレラ」の話などは、幼稚園の時期にせずにもつと後までとつておく方がよい。我々は繼父母を常に悪しき憎むべき傾向をもつものの如くに、模寫する。慣習を批難する人々と實に同感である。この繼父母繼子の關係に就て斯る種の「お話」の語

つてゐるところは決して眞實ではない、老人に聞いても皆同様に答へるであらう。先生の「思ひやり」氣轉をきかせる事「正しい判断」を働かせれば、かゝる種類の話でも子供に適する様にする事が出來やう。

お話をする時間は、幼稚園の一日の中で、一番樂しみな時の一つになつて居る筈である。この時にこそ、子供の想像を盛にし、その精神にふれる事が出来る。この時こそ、子供によい暗示を與へる。大切な機會である。——よい行爲をするやうに獎勵する爲めにも、眞のお伽噺を誘ひ込むやうにこまかく話す事によつて、人生の理想を暗示する爲めにも。

「昔々ある時」と云ふ言葉は、實にあらゆる幼稚園に於て、幼兒の眼にあたらしい光を生ぜしむる魔法の言葉である、實に理想の話は子供の心的、道徳的の、主調音をなすものである、我々は皆が本當に力と判断をもつて、この理想的話を如何に用ふべきかを知る事を切望するのである。